

簡素化左周辺部再考

焦点化、V2 現象の観点から

大塚知昇

概要

本研究では、大塚 (2020)で提案した、簡素化左周辺部とマッピング一般化に基づく分析を再検討し、これが CP 左周辺部のみでなく、v*P 左周辺部にも説明が拡張できることを示した。

1. 理論的背景

大塚 (2020)は Chomsky (2015)の Free Merger、Chomsky (2013)の Labeling Algorithm、そして Chomsky (2004)の pair-Merge に基づき、Rizzi (1997)以降提案されている、以下のような左周辺部構造を説明対象とした。

(1) [ForceP -Topic*P-FocusP-Topic*P-FinP] (“*”は再起可能性を表す)

2. 大塚 (2020)

2.1 問題提起

大塚 (2020)では、カートグラフィ研究に対して指摘されてきた、理論的、経験的問題点をまとめた。理論的問題としては、以下の三点を挙げた。

- (2) a. 多重の主要部の問題
- b. TopP の再起可能性の問題
- c. 補部選択の問題

一方で、経験的問題としては、Erteschik-Shir (2007)が主張している以下の二点を挙げた。

- (3) a. Topic と Focus を同時に満たす要素の問題
- b. Altruistic な要素の問題

2.2 提案

大塚 (2020)では、上記の(2)、(3)の問題に対し、簡素化左周辺部と Mapping 一般化の二つを想定することで、これらの解決を目指した。

2.2.1 簡素化左周辺部

簡素化左周辺部の提案を説明する上で、以下の二つの想定を行う。

1) F 素性:

大塚 (2020)では、Chomsky (2013)や Epstein, Kitahara and Seely (2020)の議論を踏まえ、談話効力に関わり、いかなるカテゴリーの要素とも卓越素性共有による Label 付けが可能である F 素性を想定した。

2) Force 主要部とフェイズ主要部 C:

C 主要部と、それとは独立した Force 主要部を想定した。C 主要部はフェイズを形成するが、Force 主要部は、complementizer の具現化の位置を保証するだけの要素である。

提案 1: 簡素化左周辺部

上記 2 つの想定のもと、F 素性に基づき、卓越素性共有の過程によって一層の左周辺部が形成される ((4)の下線部①)。この上下の位置には pair-Merge によって要素が置かれうる (下線部②)。これらの過程により、(4)の通り、左周辺部について 3 つの Area を導くことができる。また、C は Force まで主要部移動し、そこで that として発音されることになる。この想定により(2)で見た 3 つの理論的問題点が解決されることを説明した。

(4) {_{ForceP} Force, <...pair-Merge Area 1..., {<F, F> set-Merge Area <...pair-Merge Area 2..., {CP C ... }>>}

②

①

②

2.2.2 提案

提案 2: Mapping 一般化

(4)で形成された 3 つの Area に対し、本研究では Mapping 一般化を提案し、当該の Area にどの談話効力が当てはまるかはこの一般化に基づき決定されると主張した。この一般化は、それぞれの言語において言語データに基づき独自に決定されるものであり、統語的な規則ではなく一種の語用論的一般化であるという立場をとった。大塚 (2020)で言及されていないが、無論、語用論的レベルでは統語構造に基づく(4)を直接参照すること

